

『無情』のイデオロギー

波田野 節子

Ideology of “Mujeong”

Setsuko HATANO

1. はじめに

韓国の最初の近代長編小説とされる『無情』の作者李光洙はあるところで、自分はこれまで書いた小説において「その時代のイデオロギー」を描こうとしたと書いている¹⁾。「イデオロギー」という語にはさまざまな意味があるが、李光洙はこの言葉を「その時代の指導精神」²⁾という意味で使っている。それでは、1917年に発表された『無情』に描かれた「時代のイデオロギー」とはいかなるものであったのか、本稿ではそれを考察してみたい。

2. 「時代の忠実な記録」

写実を重要視し、小説を「時代の絵画」とも呼んだ李光洙だけあって、『無情』には当時の人びとの生活がよく写しだされている。主人公李亨植は京城学校の英語教師で、タップコル公園わきの校洞にある下宿に住んでいる。1916年6月、彼は安洞の金長老に請われて娘の善馨の個人教師となり、彼の屋敷に通うことになる。勤め先である京城学校（位置不明だが下宿から遠くないらしい）と校洞の下宿を行き来していた亨植の行動範囲に、安洞の金長老の屋敷が加わったところから『無情』はスタートする。

ソウルの北部、昔から両班が多く住んでいた安洞にある豪壮な長老の屋敷は「半西洋風」に改装されており、電気も入っている。一方、亨

植の下宿ではまだランプを使っている。夜になると、彼の下宿から泥峙の方角に煌々とした電気の光が見える。作者はとくに語っていないが、南山の麓は植民地時代に日本人たちが多く住んでいた場所であり、煌々とした電気の光はその日本人町から発している。文明の象徴である電気を媒介として、『無情』の空間は二つに分けられる。夜、電気の光で輝くソウルの南の地域を光の世界とするなら、朝鮮人の町である鍾路を中心とする北の地域は暗がりの世界である。英采の訪問を受けた翌日の夜、亨植は英采を求めて、夜市の人並みでごったがえす鍾路を通り、鍾閣をまわって、広通橋から清溪川沿いに、花柳街である茶房洞に入っていく。彼が通っていく道すじに広がるのは生き生きとした朝鮮の庶民の世界であるが、夜のためにその与えるイメージは薄暗い。そして、この世界は光の世界から支配と監視を受けている。鍾路のただなかには鍾路警察署があり、四辻には派出所がある。亨植の下宿の近くには校洞派出所、金長老の屋敷へ行く途中の四辻には安洞派出所があって、亨植はそこを通るたびにさりげなくその存在を意識するのである。

総督府が作った京城地図を見ると、当時のソウルには四辻ごとに派出所があった。『無情』の時間的背景は日本が朝鮮を併合してから6年後であり、総督府が憲兵警察による嚴重な監視体制をとっている武断統治期である。検閲がきびしいこの時代に、それも総督府の御用新聞である毎日申報に連載された『無情』であるが、

そこには当時の社会の姿が忠実に描写されている。

人々が移動するときには、とりわけ監視の目がつきまとう。たとえば、遺書を残して平壤に行った英采を追って、妓生房の女といっしょに「ヘイジョー」駅に到着した亨植が改札口を出ようとする、「監視に立っていた巡査がちらりと二人の後ろ姿を見（五十五節）」る。また、柄郁のおかげで生きる意欲を取り戻し、柄郁とともに東京に留学することになった英采が、柄郁の家族と涙ながらに別れの挨拶を交わしている黄州駅のプラットホームでは、「憲兵たちがこの光景をじろじろと見ている（百三節）」。そして、亨植がこの汽車に乗って英采と再会し、その衝撃で善馨と別れると言い出してデッキで友善と言い争っているとき、そのかわらわら、「赤い腕章をつけた車掌が通り過ぎながら、二人の方をちらりと見（百十四節）」て通り過ぎていく。

人を集めようとするれば、もちろん許可が必要である。三浪津の駅で慈善音楽会を開こうと思った柄郁がまず行くべき場所は警察署長のところであった。警察署長も駅長も警官も日本人であり、彼らが話す言葉も日本語のはずだが、『無情』では日本語と朝鮮語の壁は注意深く取り払われている。当時の現代小説である『無情』は、朝鮮の人びとを日常的に取り巻いていた日本の支配と監視の目をさりげなく、しかし実感をもって映し出した、まさに「時代の忠実な記録」³⁾でもあった。

3. 光と影の世界

『無情』に描き出された世界は、光と暗がりが交差して二つの価値観がせめぎあう、混乱した世界である。それは、金長老のような西洋かぶれの金持が韓屋の板の間にガラス戸をつけ、カーベットの敷いてテーブルと椅子を置きはじめた時代であり、女学生のファッションが流行して妓生も女学生の髪型を真似る一方で、長衣で顔を隠した婦人が童女に灯籠を持たせて夜道を歩いている時代である。生活様式も価値観も、あらゆる面で大変動が起きている時代である。「半西洋風」に改造されて明るい電気を使って

暮らす金長老の屋敷は、地理的にはソウルの北の地域にありながらも、光の世界に「半分」属している。一方、鍾路の薄暗い下宿で暮らし、蛆の入った不衛生な味噌汁を毎日飲んでいる亨植は、暗がりの世界の住人だ。そんな彼が、善馨の個人教師に抜擢されたことで、もう一つの世界に足を踏み入れることになったのだ。

初日、昼の光のなかで富に囲まれた善馨と会った亨植はたちまち光の世界に幻惑された。その日の夜、薄暗いランプの明かりのもとで恩人の娘朴英采と再会した彼は、闇から光へ逃れようとするように、英采から逃れようとする。善馨との出会いで点火した光の世界に対する欲望は、過去の義理を体現する英采の出現で一時的には挫折したように見えたが、このあとも意識の奥底にひそんで、彼の行動にさまざま干渉を加えることになる。

『無情』を書いたころ早稲田大学哲学科の学生であった李光洙は、当時日本でも最先端だった精神分析の知識を活用しながら、抑圧された願望に翻弄される亨植の心理と行動を描いている。たとえば、英采が身の上話をしているときの亨植の心理を見てみよう。彼女が東学くずれの男にさらわれたくんだり聞きながら、亨植の心は猫の目のようにくるくると変わっていくが、よく見ると彼の関心はずねに英采の純潔という一点に集中している。英采を守ろうとして死んだ犬の話聞いた亨植は同情するどころか、これみよがしに英采の貞操が無事であったことを喜び、つづいて英采との結婚式から新婚生活、子供を生むところまで想像を飛躍させるが、それらはまるで西洋の活動写真のように現実性を欠いて白々しい。こうした不自然で大袈裟な動きは、英采がすでに純潔でないことを望む不道德な願望が抑圧されたための「反動形成」の心理と解釈される。

では、なぜ彼は英采が純潔でないことをひそかに望むのか。亨植が英采に負っている結婚の義理は、英采が純潔でなければ消滅するからだ。英采が帰ったあとで亨植が見た、客と寝ている英采という白日夢は、まさに彼の願望をそのまま表わしている。

このほかにも、英采が身の上話を打ち切って飛び出したときに引き止めなかったこと、千円

がないことに過度にこだわって英采を探そうとしなかったことなど、亨植の潜在意識はなんとかして英采から逃れようともがきつづける。そのうえ、昼間は英采の自殺を心配していた亨植が、英采が清涼里で強姦されたのちに彼女を妓生房に残してさっさと下宿に帰ってしまうという事実は、潜在的とはいいいながら彼が彼女の自殺すら望んだことを推測させる。この推測は、友善に促されて平壤の警察署に打った保護依頼の電報に英采の人的特徴を記すのを忘れた行為によって、ますます強められる。亨植は、表面の意識では英采のことを心配しているようにみえるが、潜在意識においてはこれほどまでに「無情」だったのである。

亨植の「無情」は光の世界の住人になることへの欲望から来ている。亨植は、「朝鮮人が生きのびる唯一の道は、朝鮮人を、世界でもっとも文明化したすべての民族——せめて日本民族くらい文明レベルに引きあげることである」と考えており、自分は朝鮮全体に光を与える能力のある人間だと自負している。しかし中学しか卒業していない貧しい教師である彼には、自分の才能を生かす経済的裏付けがなかった。そんな彼が、若い男女が口を聞くことさえ稀なこの時代に、富豪の一人娘の個人教師に抜擢されたのである。亨植は光の世界に通じる扉が開かれたと直感した。結局それは的中し、彼は善馨と婚約して米國留学の切符を手に入れることになる。

4. 欲望のイデオロギー

東京に留学経験のある教師李亨植と同じく、作者李光洙も東京で中学時代をすごしたあと教師になった。1905年に東京留学した彼は、1910年に明治学院中学を卒業して故郷の五山学校の教師となり、それから5年後にふたたび東京に留学して、そこで『無情』を書いたのである。李光洙は、二度目の留学をする直前に雑誌『青春』に『金鏡』という中篇小説を発表しているが、そこには「二つの根拠地」のあいだで葛藤する教師の姿が描かれている。「二つの根拠地」とは主人公金鏡が中学時代に文学に目を開いた東京白金（明治学院の所在地）と、

彼が教師として働きながら健全な朝鮮人の自覚をもった故郷の五山である。自分の才能に自信をもち「成功欲を満たせる事業をはじめたい」と望む金鏡は、「五山がこの欲望の対象としては小さすぎる」ことに苦しみ、長い逡巡のはてについに東京に行くことを決意する。亨植と同じように、金鏡も光の世界への欲望にとらわれ、それを成就させたのだ。この亨植と金鏡の姿は、作者李光洙自身を投影したものだと考えられる。過去をふりすてて光の世界を欲望した亨植や金鏡と同様、李光洙もまた五山学校と息子を出産したばかりの妻を残して東京に留学することを決意した人間だからだ。

『無情』において、李光洙は自分の分身である亨植の欲望を肯定しているが、精神分析になじみのない読者にとっては、亨植の行動と心理は分かりづらい。とりわけ亨植が平壤で見せる行動と心理には謎がおおく、金東仁は『春園研究』でこの部分を「作者の詐欺術」¹⁴⁾だと批難しているほどである。しかし亨植が英采から逃れることをずっと欲していたことを前提とすれば、平壤における彼の行動は納得される。英采が警察に保護されていないと知ってただちに彼女が死んだと結論づけた亨植が考えたのは、まず食事のことだった。彼は解放されたのだ。この解放感彼の気分をしだいに高揚させ、恩師の墓の前で最高潮にたつする。恩師のみすぼらしい墓の前での亨植の姿は次のように描かれている。

「亨植はこの墓を見て、さほど悲しみはしなかった。亨植は、なにかを見て悲しむには心があまりに楽しかった。死者を思って悲しむより、生きている者を見て楽しむべきだと思った。亨植は、墓の下の哀れな恩人が腐って残した骨を思って悲しむより、その腐肉を養分にして育った墓の上の花を見て楽しもうと思った」（六四節）

内部に押しこめられていた亨植の欲望が、解放感とともに外側にまであふれ出したのである。欲望の姿、それは死者を悼むよりも生きている喜びを謳歌し、悲惨な死を迎えた恩師の死体を肥やしに咲き出した花からも美的快楽を享受しようとする、おぞましくもエゴイスティックな姿であった。だがここには、これが人間の

本来の姿なのだという李光洙の人間認識があらわれている。人間は社会生活を営むためにこうした本来の姿を内部につつまかくして生きているが、実は、この本能的な欲望こそが生存の原動力である、というのが李光洙の人間観であった。彼がこのような認識を持つようになったのは、白金ですごした中学時代である^v。

亨植が墓の前でいただいた感慨は、論説文『子女中心論』の、「われわれは(中略)必要ならば祖先の墳墓を毀し、父母の血肉もわれわれの糧食とせねばならぬ」という一説を想起させる。『子女中心論』で李光洙は、朝鮮が衰退したのは儒教による父母中心思想のせいであるから、これからはすべてを子女中心に考えて生活し、父母たちは自己を犠牲にしても子女に「教育」をあたえねばならないと主張した。あたえるべき「教育」とは、生存競争に打ち勝つ力を育てる教育である。彼がこの時期に書いたすべての論説文で生存競争の理論が前提とされており、そこには生存競争に劣敗した朝鮮はこのままでは淘汰されるという危機意識が色濃くただよっていた。

『無情』と同時期に発表した論説文『教育家諸氏に』^{vi}において李光洙は、生存競争とは各生物が本能的に生きようとする欲望によって引き起こされるものであるから、原動力たる欲望が大きいものが競争に勝利する、それゆえ教育家の責務は、子女に「欲望の教育」をおこなって、「巨富」「大学者」「大宗教家」「大文学者」「大教育家」を熱望する「大欲望」を持った人間を作ることだと主張した。論説文におけるこのような主張は、そのまま、『無情』の最終節の「我らにはさらなる力が必要であり、さらなる大人物——大学者、大教育家、大実業家、大芸術家、大発明家、大宗教家があらわれねばならない」という作者の言葉につながっている。

以上から明らかなように、『無情』は読者に対する「欲望の教育」の一環として書かれた小説であり、いうなれば「欲望の啓蒙書」だったのである。李光洙が『無情』で描いた「時代のイデオロギー」とは「欲望のイデオロギー」であった。

5. 反欲望のイデオロギー

ところで注目すべきことは、『無情』には同時に「反欲望のイデオロギー」と言うべきものも描かれていることである。こちらは作者の声高な主張を通してではなく、人物や風景の描写を通してあふれるように読者の胸を打ち、そして読者はむしろこちらのイデオロギーに魅了される。

たとえば、善馨と英采では、あきらかに英采の方が美しく描かれている。はじめは「咲いたばかりの花」(二七節)のように美しかった善馨は、亨植と対等の個人として自我を持ち始めるにつれてしだいに醜く描かれるようになる反面、捨てられても亨植のことを許す古風な英采は、寂しさを漂わせつつも最後まで美しく描写される。また、昼の光のなかにある京城学校が妻学監との権力闘争との場であり、学生たちとの自我競争の場として、生々しく、かつ滑稽に描かれるのとは逆に、夜や夕暮れどきの場面しか出てこない庶民の街は、愛情をこめてじつに美しく描かれている。これは何をあらわしているのだろうか。

もちろん、そこには自分の育った場所の文化に対する愛情があらわれている。いくら暗くても、そこは自分を生み育てた故郷である。そして英采は欲望をもつ他者として対立することのない、母のような存在なのである。だがこのほかに、彼の内部には欲望を肯定すると同時に嫌悪するアンビバレントな傾向があったことが、この二面性にはあらわれている。

『金鏡』と同じ時期に書いた短い論説文「共和国の滅亡」^{vii}で彼は、人びとが古来の秩序のなかで平和に生きていた理想郷が外部から侵入した「自由と権利の思想」のせいで崩れ、人民が「乱民」と化してしまった現代の風潮を批判して、「ああ、我々は皮相な文明に中毒して、この長く続いた共和国を壊してしまったのだ」と嘆いている。また1923年に発表した『許生伝』では、指導者のもとで秩序を保って発展する共同体と規律を失って野蛮状態におちいる共同体の対照的な姿を、二つの島によって描きだし、秩序と規律が消えたときに現われる人間本来の姿に対して強い不信と嫌悪を表わした。

欲望こそ生存競争に勝って生き残るための原動力だと考えていた彼は、同時に、人間が自分の欲望を解放して本能のままに生きたら人間の住む社会はどうなるのかという、哲学的な懐疑をいただいていたのである。

6. おわりに

李光洙は【無情】において民族が生きのびるために必要な「欲望のイデオロギー」を「時代のイデオロギー」として描き出した。しかし同時に、自分を育ててくれた故郷を侵食しているこの「欲望のイデオロギー」への嫌悪感と故郷への愛情は、「反欲望のイデオロギー」として作品の随所にあふれ出したのである。

*本稿は、2005年11月11日にソウルの延世大学で開催された国際ペンクラブ韓国本部主催第12回国際文学シンポジウムにおいて、韓国語で講演した内容の日本語原稿に加筆修正したものである。なお、本稿執筆にさいしては県立新潟女子短期大学図書館司書の鶴巻悦子氏から資料調査にご協力いただいた。

ⁱ 「余の作家的態度」、1931<東光>所載、三中堂『李光洙全集10』p.461

ⁱⁱ 同上

ⁱⁱⁱ 同上

^{iv} 金治弘編『金東仁評論全集』、三英社、1984、p.96

^v 波田野節子、「ヒョンシクの意識と行動に現われた李光洙の人間認識について—【無情】の研究(上)—」参照、『朝鮮学報』第148輯、1993

^{vi} 『毎日申報』、1916年11月26日～12月13日連載

^{vii} 『学之光』第5号、1915、pp.9-11